〔国際シンポジウム〕

欧米研究者から見た東亜同文書院

東亜同文書院大学記念センター長　藤田佳久

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：皆さん、こんにちは。ただ今より愛知大学東亜同文書院大学記念センター、オープンリサーチセンター国際シンポジウム「欧米研究者から見た東亜同文書院」を始めさせていただきます。私は本日の司会を務めます東亜同文書院大学記念センターの運営委員で、かつ愛知大学現代中国学部の馬場と申します。よろしくお願いします。最初に私どもの東亜同文書院大学記念センターの藤田所長から挨拶をさせていただきます。藤田先生、お願いします。

藤田佳久（愛知大学東亜同文書院大学記念センター所長）：皆さん、こんにちは。数日前台風が来たときには、今日はどうなるかとだいぶ心配しましたが、昨日少し台風の後始末ができて、今日はなんとか校舎の中もきれいになりました。昨日までは枝葉がいっぱいで緑の絨毯のように変わってしまいまして、我々も大変びっくりしました。今から50年ほど前に大きな台風がありましたが、それ以来の台風で皆びっくりしましたが、この辺の空気も一新してきれいになってしまったというところがメリットかもしれません。被害を受けた方々もおられますので。今日は交通網も含めてちょっと心配ではありましたが、そういう中お集まりいただきまして大変ありがとうございます。

今回、ここにございますように国際シンポジウムという形で「欧米研究者から見た東亜同文書院」というシンポジウムを開かせていただきました。この背景には、我々の東亜同文書院記念センターが今年4年目ですが、全部で5年計画という大きなプロジェクトを文科省に認定していただいたことがあります。いわゆるオープンリサーチセンタープロジェクトです。広く多くの方々に我々がやっている事業を知っていただくという主旨ですが、その一環として初年度からこのシンポジウムをやっています。

一昨年は、中国の特に上海交通大学を中心とした研究者の方々と我々との間でシンポジウムを開かせていただきました。上海交通大学は東亜同文書院が1937年に校舎が焼けた後にそこへ移って終戦の年まで授業をやったという関係があります。初めて中国の研究者の方々が向こうに残っている書院の資料をいろいろ集めてくださって、それをベースにしてお話をいただいた。その中には1937年までは隣同士であった書院と交通大学の間は非常に友好関係があって、学生諸君もずいぶん交流をされていたし、書院の仮装行列、運動会のときには交通大学の方々もたくさん見に来ていたというお話もありまして、新しい情報をいろいろ得たように思いました。そういうことが一昨年ありまして、昨年はまた国内のシンポジウムをやりまして、今年はその翌年ということで国際シンポジウムの年でして、これが今度のプロジェクトの中の最後の国際シンポジウムになりますが、今度は欧米の研究者の方々が東亜同文書院をどのように見てくださっているのかというテーマでシン

ポジウムを開かせていただきました。

また愛知大学は文科省のＣＯＥプログラムに採択され、国際中国学センターを立ち上げて今日まで続いますが、それのデリゲーションと言いますか、ヨーロッパやアメリカへそれぞれ分かれていろんな大学と提携と言いますか、学術的な交流を行いたいというので、現地に行きました折に驚くほど書院の評判が広がっていまして、我々も意を強くしたのであります。しかし愛知大学という名前はあまり知ってもらっていなくて、書院の名前を出してその後継だということで知っていただいたという次第でした。そういう点で各大学を回ったときには書院のおかげで非常に親切に受け入れていただきました。そういう意味でもぜひ、我々としても一度欧米の研究者の方々が、では実際に東亜同文書院をどのように研究されてきたのかということでシンポジウムを組んでみたい。これは前からずっと思っていたことで、本日これがここに実現することになりました。そういう点ではおそらく非常に画期的なシンポジウムだと思いますし、我々としても今日のシンポジウムを非常に楽しみにしています。

今日は海外から３人の方をお招きしました。お１人目はダグラス・レイノルズ先生、ジョージア州立大学の歴史学の教授です。こちらの先生は東亜同文書院研究の最初の段階で多くの作品を戦後書いていただきました。東亜同文書院の記念賞も受賞されています。そういう点で書院に関して非常に関心をもっていただいているということで、すぐお願いしました。ちょうど東大で研究会があったときにお目にかかったものですから、そこですぐお願いをして、快く引き受けていただきました。

フランスのアカデミーの学士院のマリアンヌ・バステド・ブルギエール先生です。我々のほうは先ほど申しましたＣＯＥプログラムの中でフランスにお邪魔したときに先生にお目にかかりまして、戦後書院の研究のために日本へ来られたのだと。そのときは愛知大学にそういう資料があるとは知らなかったから東京とか京都でいろいろ資料を探されたというお話を伺ってずっと頭の中に入っていたものですから、今回はぜひお願いしたいということで。こちらも非常に親切にお引き受けいただきました。

３番目はニキ・ケンジ先生です。現在ミシガン大学でいわゆるライブラリアンとしてご活躍です。特に日本、アジア系の文献収集はいちばん力をもってやっておられます。ミシガン大学は全部で図書冊数が750万冊あるというお話で、愛知大学は160万冊くらいですから数倍の規模をお持ちです。そのアジア部門を中心にマネージされているということです。我々がこの３月シカゴで開かれたアジア学会にお招きいただいたときも非常にお世話になりました。そういう点でデータベースも含めて今や世界のトップで活躍されているということで、今日はその先端のお話をあわせてお伺いするということでお願いしました。心安く引き受けていただきました。

そして、せっかくの機会ですので、我々の若手の今目覚ましく研究を進めている武井さん、我々のポストドクターのポジションで研究をされていますが、武井さんから全体の欧米を中心にした、特にアメリカを中心にした研究が中心かと思いますが、東亜同文書院をめぐるレビューをお願いしました。

最後にコメンテーターとして栗田先生ですが、栗田先生は毎回こういうチャンスがあるたびにお招きをして貴重なコメントをいただいています。今日もいろいろ問題提起型のコメントをいただけるということで期待をしています。

ということで、それぞれの分野で最も東亜同文書院に近い研究者の方々にお願いして今日このシンポジウムが開けるということで、大変我々としては期待をしています。どうぞ最後までご清聴いただきまして、また馬場先生からご紹介がありますが、最後には懇親会もお金をとらずにやります

ので、ぜひふるってご参加いただいて、先生方とご交流をお願いできたらと思っています。ちょっと長くなったかもしれませんが、私の最初の挨拶とさせていただきます。どうぞ今日はよろしくお願いします。以上です。

馬場毅（東亜同文書院大学記念センター）：それでは最初にジョージア州立大学のダグラス・レイノルズ先生に、「明治のもう一つの革新的パイオニアとしての東亜同文書院」のご報告をお願いしたいと思います。どうぞレイノルズ先生。

ダグラス・R・レイノルズ（ジョージア州立大学）：ありがとうございました。ペーパーを発表する前に少し下手な日本語で自己紹介ですが、これはキャリアの自己紹介ではなくて、生活の自己紹介です。今は65歳です。私の生活の半分はアジアに住んでいました。だから江戸っ子という言葉がありますが、私はアジアっ子かもしれない。いちばん最初は2歳から6歳まで1947年から51年まで私の両親は教育宣教師として中国に行って、安徽省蕪湖でしたが、その後は革命の関係で中国を出てアメリカへ帰って1年間、あとはフィリピンに行きました。7歳から17歳まで私はフィリピンに住んでいました。その後は大学院で勉強するためにアメリカへ行って、その後台湾は2年間、67年から69年まで中国語を勉強するためにです。元々の専門は中国近代史です。博士号を取った後は日本に来て、76年から80年まで東京で、そのときは衛藤瀋吉先生のおかげで東亜同文書院、東亜同文会のことを勉強するようになりました。その後アメリカに帰って86年から88年までもう一度日本に来て、日中近代文化交流史の研究を続けて、その後もう一度アメリカに帰りました。最近は2002年から毎年の夏休みに中国へ行きます。夏休みは中国で研究、けど研究のテーマは同じように日中文化交流史です。短い生活の紹介ですが、これからペーパーに入りましょう。

Professor Douglas R. Reynolds, Professor, Georgia State University:
The title of my paper, "Tō-A Dobun Shoin — Yet another Meiji Innovation."

It is a great honor to deliver a paper at this distinguished lecture series. When Fujita Yoshihisa invited me to give this lecture, he requested that I discuss Tō-A Dobun Shoin (TDS) from the point of view of foreign research and foreign perspectives. TDS, along with Tō-A Dō-bunkai (TDK) have been subjects of my research for more than 30 years.

These two topics were first suggested to me by Professor Etō Shinkichi in 1977 while I was living in Tokyo and using the archives of Gaikō Shiryōkan. As I learned more about TDS, this Shanghai school came to represent in my mind an interesting but little known example of Japan-China relations and friendship. Then, to my surprise, I came to realize that the approach of TDS to education, so the approach to education – which were the approaches developed by Arao Sei and Nezu Hajime – was an approach that in the 1960s when I was in graduate school at Columbia University, it was an approach called area studies or chiiki kenkyū in America. The curriculum, the teaching at TDS was very, very much like the curriculum I was studying, the program I was on, at Columbia University. So the field of education known as area studies developed in the US only after World War II. TDS, however, developed this approach more than 50 years earlier. I was deeply impressed. And in 1986, I published an article called "Chinese Area Studies in Prewar China: Japan's Tō-A Dōbun Shoin in Shanghai,